

### 精神科の敷居下げる

アロマオイルの香りが漂う診察室。観葉植物と花が飾られ、白いレースのカーテンが、日の光を柔らかく遮



る。「患者さんも私も、気持ちが悪くなるようにしています」一九九四年、「うつ病などの治療を軽症の

八事クリニック（名古屋市昭和区）

院長 半田 容子さん（58）



手書きのカルテを前に話す半田容子さん＝名古屋市の八事クリニックで

## 人生を深める手助け

名古屋大医学部に進んだ。精神科の病気は、その人の性格や成育環境などで背景が違い、同じパターンはない。問診で「なぜ無理をしたのか」などと考えてい

く。女性の場合、以前は産後うつが多かった。最近では介護うつや発達障害児の母親のうつが増えてきた。経済的に問題が背景にある場合も。言葉で働きかける精神療法や投薬での認定医になろう」と

勉強を開始。研究に興味を湧き、五十歳で大学院に入った。診療や論文で忙しさがピークになったころ突然、髪の毛が抜け始めた。全頭脱毛で半年間、カツラの生活。「ストレスは、さまざまな形でサインが出る。『これ以上頑張ったら駄目』のサイン」だった。こうした経験で、心の健康の問題に関心をもち、産業医を引き受けるように。ある会社では、診療所の看護師が「頭痛を訴えているけどメンタルでは」と連れてきた社員が、軽いうつ病だった。動く気力を無くした若い社員が復職する（境田未緒）